

MAPPS story

Series Column

Why do we built this platform?

内田 剛史

早稲田システム開発株式会社
代表取締役

Ep. 23

「博物館力」の
伝達方法

そこにインフラはあるのか

ミュージアム界隈でも、IT活用のアイデアは多数生まれています。中には素晴らしい事例もあるのですが、なぜか、その後は音沙汰がなくなるケースが多いですね。いったいなぜなのでしょう…実は、理由はハッキリしています。

「ポケット学芸員」の船出には、もうひとつ大きな意味がありました。自分でも忘れていたのですが、弊社のFacebookにお寄せいただいたとあるコメントが、それを思い出させてくれました。

「単館では難しいこのアプリ、とても素晴らしいと思います」

このコメントは、ずっと抱いていた博物館業界に関する漠然とした疑問を解決してくれたのです。

素晴らしい試みだと思う。でも…お金がない！

時間が経つのは早いもので、もう6年も前のことになるのですね。私は、この「MAPPS Story」のEP.13(2010年1月)で、ミュージアムの格差拡大について触れました。当時は、いわゆる「ミュージアムIT」の将来性について、さまざまな場で耳にしたものです。

アカデミックな雰囲気、長年の研究成果と最新技術がしっかり噛み合う素晴らしい発表内容。しかし、先進的な試みのニュースに触れるたびに、ぼんやりとした違和感を覚えていました。

それは、目の前で解説される博物館サービスの将来像と、自分が普段お世話になっている館の姿が、重なって見えなかったのです。「技術は凄いいし、メリットも高そうだな。でも、日頃お世話になっているお客様にも導入できるのだろうか」。

こうした先進的なプロジェクトを推進している館は、一部の例外を除いて、多くは次のいずれかに当てはまりました。まず、日頃から運営資金に余裕がある館。あるいは、何かの理由で一時的な財源を得た館。ネームバリューがあり、企業が無償で提供しても見返りが期待できそうな館…。平たく言えば、「お金に困っていない」という感じでしょうか。

ご存じの通り、ミュージアムは、多くが資金難の状態にあります。情熱と手づくりでカバーする館もたくさんありますが、言うまでもなく「限界」があります。先進館が新たなプロジェクトを導入するということは、こうした大半の館との差が開く一方になる…ということを意味しているのです。

その試みが広がらないのは、「フォロワーがない」から

これは、単に「予算の厳しい館はかわいそう」という話ではありません。なぜなら、こうした新しい試みは、その大半が「後続」が現れずに終わってしまうからです。

他館が追随できる環境が整わなければ、その技術は、その館限り。まるで、充電スタンド網というインフラが整わないのに新しい電気自動車だけが次々と出来上がっていく、そんな光景が目につくものです。

スマホアプリである「ポケット学芸員」も、一応は新しい試みのひとつに分類されると思います。でも、こちらはすっかり普及した「スマホ」というインフラが。また、「ポケット学芸員」は博物館クラウド<I.B.MUSEUM SaaS>の機能の一部ですので、ご利用の館であれば導入予算はゼロ。システムに登録されたデータを流用できるので、準備も手間も最小限で済みます。

博物館から見ると、<I.B.MUSEUM SaaS>が充電スタンド網で、「ポケット学芸員」が電気自動車。これも、「インフラがある」と言えるかと思います。予算と人員が不足し、たとえ意欲があっても先進事例のフォロワーになれない多くのミュージアムに、簡単に導入いただけるサービスができた。これは、個人的に大きな意味を持ちます。

Facebookに書き込まれたコメントを読んで、あの時に振り払えなかった霧が晴れたような気分でした。

第11回 平成28年4月30日発行